

作業が楽になる「VLOOKUP」を使いましょう!



「VLOOKUP」は、Excelの代表的な関数です。便利で時間短縮が図れるこの関数を覚えて、すいすい作業ができるようになれば……。

この関数を扱うには、まず、対象となる「セル」の番地が分かっているといけません。Excelの画面で、左上隅のセルの番地は「A1」です。その右は「B1」ですね。このように、Aから順に右方向にアルファベットが割り振られています。

	A	B
1	1	あらあら
2	2	まあまあ
3	3	うんうん
4	4	まずまず
5	5	ほいほい
6		

今、左の表で、「まあまあ」と表示されたセルの番地は何でしょう。そうです、「B2」ですね。上と左のバーに色がついているのでわかりやすいですね。(ここからは、この「番地」を使ってお話しします。)

	A	B	C	D	E
1	1	あらあら			
2	2	まあまあ			
3	3	うんうん			
4	4	まずまず		2	まあまあ
5	5	ほいほい			
6					

さて、セルD4に「2」が入ることで、セルE4に「まあまあ」と表示されています。セルE4には、VLOOKUP関数が仕込まれているのです。具体的には、どんな数式が格納されているでしょう。

答えは、「=VLOOKUP(D4,A1:B5,2)」です。

で、この式の意味は……??

「A」列から順に「B,C,D」と右方向にアルファベットを使って、この調子で「Z」までいったら、次はどうなるのでしょうか。

実は、その次は「AA」列ということになって、使えるスペースは意外に広がっています。このようにして、右方向は「IV」の列まで使えることになっています。「IV」では直感的に分かりにくいので、その位置を数えると、右に256列目です。右方向に256列の広がりがあるということです(Excel2003の場合)。

対して、縦方向には、65,536行あります。セルを画面の一番下まで持って行くと、その行数が左のバーに出るので分かります。(256×65,536=16,777,216個のデータが扱えるということです、たいていそんなデータは学校には関係がありません。)

はるか右下のセルの番地は、「IV65536」だということですね。

解説

=VLOOKUP(D4,A1:B5,2)

はじめに「=」をつけないと、関数として処理してもらえず、ただの文字列に成り下がってしまいます。

「D4セルに入る数字により、結果を求める」という宣言

「A1番地からB5番地までの範囲を参照する」ということ。「:」は「~」です。

「その範囲の2行目を答えとする」という設定

この式のおしまいの「2」を「3」にすれば、3行目の内容が反映されるはずですが、ここでは3行目が存在しないので、実行するとエラーが出ます。「A1:B5」ということは、AとBの2行しかないのです。(↑セルA1"からセルB5"までの範囲ということ)

この数式、実際には、「=VLOOKUP(D4,\$A\$1:\$B\$5,2)」のように使われます。いかにもごちゃごちゃしていて、見るのもいやになりますね。(Excelで関数をあきらめるきっかけがこのごちゃごちゃ感です。)この「\$」マークを「ダラー」と読み、「絶対参照」であることを表します。

VLOOKUPを使うには、この「絶対参照」の知識が不可欠です。「絶対参照」とは何か、また、その対義にあたる「相対参照」との比較などについては、次回、改めて説明します。

